

Title	日本吉利支丹宗門史(第五回)
Sub Title	
Author	Pages, Leon(Yoshida, Kogoro) 吉田, 小五郎
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.139(467)- 148(476)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本吉利支丹宗門史（第五回）

レオノ・パジエス著

吉田小五郎譯

第八章 一六〇六年(慶長十一年)^(註)

神父アレキサンデル・ワリニアニの死——五島及び平戸に於ける傳道——司教に依つて非認せられたる奴隸賣買——耶蘇會の宣教師六名の到着——ドミニコ會の宣教師——船長ドノソの船——アウガスチン會の宣教師——京極マリアの娘の葬儀——坊主ども耶蘇會の宣教師を公方様に告訴す——秀頼の母神父等に對する迫害を嚴にせん事を望む——司教の公方訪問——肥後の慈悲役等、牢内にて一宣教師に慰を受く——八月二十六日、牢内に於けるジョアキム・ワタナベ・ヒロエモンの死——彼が伴侶二人の苦惱

一六〇六年一月二十日(慶長十一年十二月十二日)金曜日、巡察使アレキサンデル・ワリニア師(Cle P. visiteur Alexandre Valignani)はマカオで聖者の如く死んで行つた。一六〇四

年に認められた感歎すべき書翰の中で、彼は、^{ペール・シェネル}神父長に慈悲を以て、其經營の職を解かれんことを嘆願した。此貴重なる遺書は、今に保存されて吾々に、其謙讓、自らの救濟並に其完全なる服従に於て、聖なる巡察使の宗教的德義の生きた證據となつてゐる。彼は、ヨブ(Job)の言葉を藉りて、己れ自身の住居をとゞのぐる餘暇を欲しがつてゐた。併し彼は自分が耶蘇會の會員で、自身の主でない事を述べ、たとへそれが希望を述べたに過ぎぬにせよ、服従を忌避するやうに見えることを見まなかつた。

併し彼は萬一の場合、死ぬときの用意に支那に於ける耶蘇會の長老には、マテオ・リッチ尼(P. Mathieu Ricci)をといつて居つた。

一月十三日(慶長十一年十二月五日)マカオの神父等に執つては靜養

地でもあり、潛伏の場所でもあつた綠島(L'Île Verte)に散策して歸つて來ると、彼はひどい尿^{ストラッシュ}滴瀝にかゝつたが、此病氣には良藥も宣教師が總がゝりの祈禱も一切遂に無效であつた。病床にあること七日の後、彼は其使徒的の靈魂を天主に返した。時に七十に達せざる事僅にして、之まで耶蘇會に四十年を過し、アジアの傳道に從ふこと三十年であつた。彼は死ぬる四日前、數行を認め、これで自分を耶蘇會に引き入れ給うた天主に對して感謝の意を表する事を望んだ。

日本に於て、彼は最も遠大な基礎の上に組織された耶蘇會を遺して行つた。彼の管下に、學林、傳道所若しくは教會が三十一建立せられ、三百の教會堂が或ひは建てられ、或は準備され、内百六十は宣教師等が直接の管理の下にあつて、常に彼等が訪問を受け、又百四十は問答師でもありキリシタンの頭株である管房(Cambos)即ち監督に委任されて居つた。成年者や若者達の多くの會は、主なる教會堂の中に設立され、之が無數の天職の原動力であつた。

神父ワリニヤニの配慮により、宣教師等は傳道の用に宛てられてゐた收入を他に流用するといつたやうな王の不誠意があつたにも拘はらず、嘗て必需品を奪はれるやうな事

はなかつた。かくて使徒聖パウロの助言に依り、新にキリストンになつたものに對して負擔の重くたるやうなことはなかつた。教會には、儀式に必要な祭器其他を有し、又傳道所には孰れも公式の贈品用として、ヨーロッパの珍奇な品々を別においておいた。

同じく此崇敬すべき神父は病人や廢疾者、殊に誰にも一番顧られない癩病患者の爲に若干の病院を建てた。彼が個人でローマ、エスパニヤ、印度並にマカオより受けた布施は、鄉國を追はれた九百人餘のキリストンを養ふに十分助となつた。

神父ワリニヤニは、又支那の教會の創設者とも考へられる。神父等は廣東市内の外に駐在所有してゐなかつたが宣教師等は新舊の首府、即ち北京と南京とを訪問した。

同神父の最も、重要な事業の中に、吾人は、一五八七年(天正十五年)彼が印刷機械をヨーロッパより日本に將來し、日本字の活字を作る爲に職工を連れて來た事を想起すべきである。此印刷機械を以て、ラテン語より翻譯されたり或は宣教師等が自國の言葉を以て作つた數多の著作を印行することになつた。修學院に於ては音樂や繪書の組^{クラス}が宗教的儀式の必要上から出來て居つた。

教區の ^{レツトル・ア・ニユエル} 年報が定期に逐次刊行し始めたといふのは、要するに神父ワリニアニの命によるのであつた。年報を書く爲に一宣教師が任命され、多數の者が命を受けて之を校閲した。

この偉大なる宣教師に對し、エスパニヤ王フィリップ二世やオーストリヤの権機官の如き最も著名な人々が、尊敬を拂つた事、年々彼に書を送つて彼の忠告を求めたほどである。彼の言葉は、その重要さに於て教皇の次にあつた。
(註四) 神父長は死を知るや、各地の管區長に宛てた廻狀の中で、己のために、全く別格に耶蘇會の熱心な祈禱をなすべきことを依頼した。

帝國の紛擾と公方様の好意なき意向とは、宣教師等が其駐在所を増すを許さなかつた。彼等は長崎、有馬、及び京都の三箇所に限られ、其いづ地に於ても囚徒や流人の如き有様であつて、帝國の他の地方に傳道の出來るといふのは稀であつた。最初の傳道は、長崎附近の一地方に試みられた。斯が、同地の大名は、宣教師等が滯留することを許さなかつた。神父は大名の不在に乗じて同地に赴いた。彼は或有名な魔法使の傲慢と無智とを挫いた。この魔法使は自ら、地上に於ける神の代理と稱し、魚や鳥獸にまで勢力を

を振ひ、萬病を治すと稱してゐた。十五日の間に、千五百人の告白を聽き、又六百人の人が ^{サン・コムニオン} 餐を受けた。彼等は孰れも生れ乍らにしてキリストとなり、生母の乳と共に教理を吸つてゐて完全に準備は整つて居つた。

第二回の傳道は五島の島に行はれた。同地のキリストは、よく保存され、領主もこれに好意をもつて居つた。一人の神父は、毎年同地に赴いた。此年千八百人の告白があり、又小兒、成年合せて百人の洗禮があつた。之等諸島には、戦争中捕虜となつた若干の朝鮮人のキリストが居つた。其中の一人バウロといふ者と其妻のアンナとは、同國人の間、否日本人の間にさへ多數の改宗者を出した。もう一人他の朝鮮婦人でウルシュール (Ursule) といふ者は今はの際に、宣教師の訪問を受け、自分はキリストとなりてより以來、長年罪を犯した覚えがないと其宣教師に語つた。如何にもかの神父も彼女に赦罪の材料となるものを見出しが出來なかつた。かくて彼女は、前から厚く信じてゐた通り、洗禮の清淨の中に其魂を創造主に返した。五島の群島を立つ前、神父は、領主から此島々の中の要地ワコチカ (^{小壇賀島か?} Vagotchien) に宣教師を一名留まらせるの許可を得た。

第三回の傳道は平戸に行はれた。同地の大名は、キリスト宗門に反対であつた。同地のキリストは、昔からのもので其數も仲々多く又頗る熱心であつた。宣教師は秘かに同地に赴き、「屢々信者を訪問」、彼等の信仰の厚いのを見て甚だ慰められるところがあつた。

朝鮮人の囚徒の序に、吾々は人類の自由の爲に、教會の断えざる干渉について調査し、公にすることを幸に思ふ。朝鮮の役後、何かの機會にポルトガル商人の中には、戦争の捕虜を買収して、之を印度に輸送し、同地で買却する者があつた。屢々人々は、之等の不幸な人々を數年間奴隸として仕ぐるといふ契約をさせた。司教ドン・ルイス・デ・セルケラ (D. Luis de Cerqueira) は、一五九八年 (長三年) 日本に到着して以來、此惡弊を斷たんが爲に、耶穌會の長老や有力なる神父を以て嚴肅な會議を開き、有罪者に對しては、教會の一番の重罰を課することを命じた。^(註五) そして、すつと彼は厳しく監視した。

八月五日 (○七月二十日) 六名の耶穌會員が定期の船で印度から日本に着いた。彼等は支那海で恐る可き颶風に遭ひ、人力を以て救ふべき術もなく、至聖の聖母、及び此日恰も祭日に當れる聖イグナシオ (Saint Ignace) に救を求めた。甲比

丹並に船員は船の前帆を長崎のノートル・ダーム寺 (Notre Dame de Nagasaki) に奉納するの誓を立てた。かくて彼等は奇蹟的に助かつた。彼等は船から下りると、跣足で全市を通過してノートル・ダームの禮拝堂に至り、其誓を果した。

ドミニコ會の宣教師神父デ・メーナ (P. de Mena) は、長老により肥前の國に遣はされた。耶穌會の神父等は、既に此地に在つて説教し、又會堂を建てゝゐたのであつたが、主要なる町には、尙傳道してなかつた。神父デ・メーナは長崎を去る二リューなる肥前の深堀港 (Foucafori) に甲比丹フランシスコ・モレノ・ドノソ (Francisco Moreno Donoso) によつて指揮せられたるエスペニアの一船の着岸したことを聞いて、之を訪問すると、彼は七月二十一日 (六月廿日) 多數のフランシスコ會の宣教師と共にマニラを出發し皇帝 (康家) ^(註六) が其領内に於て通商の關係を開かんとの希望を満足せしめるが爲に、其自領關東に行つた。其船は、激烈なる嵐の爲に船路外に吹き流され、關東の教會 (此教會は神父ゼローム・デ・イエズス (P. Jérôme de Jésus) が此呼名の下に奉獻したものであつて、彼は光榮ある伴侶の殉教の後、建てたのである) の守護神ノートル・ダーム・デ・ロザ

リヨに祈願したる後、奇蹟的に助かつた。ニチザヨヤン(Nichtzayemon)といふ深堀の奉行は、肥前の大名を、其首府佐賀に訪問する序に神父デ・メーナと共につれて行つた。

甲比丹も亦謁を賜つた。其豊かな贈物とエスペニア風の上品な舉動とは、大名の心にかなつた。彼は此機を利用してドミニコ會の神父の爲に同國に在住するの許可を願つた。

大名は之を許し、同時に傳道所を設け教會堂を建てる許可も與へた。但し近頃、私事の爲に京都から肥前に來た高位の坊主ガコ(Gaco 聖元信か大日本史料)の助言を容れるやうに望んだ。神の許可により、ガコは何等の反抗もしなかつた。

深堀には耶蘇會の教會堂があつたので、神父デ・メーナは、此處に第一の會堂を設けず、海から三リユウを隔てたベマヤチ(Famamatchi)に之を建て、ノーホール・ダーム・ド・ロヂリヨの保護の下に置いた。間もなく彼は、鹿島(Cachima)に他の一箇の會堂を建て、聖ヴァンセント(Saint Vincent)に奉獻した。尙程經て第三の教會堂を首府の佐賀に建てた。此事は初めの中は拒絕されたのであつた。がくて神父は、聖ペウロを以て守神とした。神父は人々から非常な尊敬を受け、世の人之を捨世の伴天連(Chacheino Padre)即ち現世を捨てた神父といつた。

七月一日(○五月二日) 薩摩の京泊の會堂にて始めてミサ聖祭が執行された。

アウガスチン會の修院長ベルメオ師(P. Berneo)は、病に罹つてマニラに歸つた。彼の代りとして神父アロンソ・ムノス(P. Alonso Munoz)が五人の宣教師を引きつれてやつて來た。神父エルナンデ・デ・サン・シモン(P. Hernan do de Saint-Joseph)は、當時豐後より佐伯(Saiki)の近傍に行き、其首府に小やかな修院を建て、聖ジョゼフの保護の下においた。イチノカミドノ(Ychinocamidono)といふ領主は、一度改宗した背教者で、彼は自費を以て教會堂及び更に大なる修院を建立せしめた。神父は佐伯にあつて大なる結果を收めて後、日向(Fionuga)に行き、其首府アガタ縣(Canga-ta)に於て働いて居つた。彼は領主の保護を得て、教會堂を建立し、之を聖ニコラス・デ・トレント(P. Saint Nicolas de Tolentino)に奉獻した。幾もなくして、縣に於て兒童の洗禮の水に再生したものを除き、二千人のキリストンをつくることが出來た。アウガスチン會の宣教師も、亦長崎に駐在所を有し、之を聖アウガスチンの保護の下においた。

其頃京都の近傍で名門の一婦人が亡くなつた。即ち其兄

弟は各一國の領主にして、帝國の正統の後繼者たる秀頼の母の従妹に當る、元近江の領主の夫人マリア京極の女がそれであつた。此婦人は異教徒を夫に持つてゐたけれども、常にキリストンとして生活し、又立派なキリストンとして死んだ。夫は異教徒としての葬儀をしたいと望んでゐたがマリアはどうしても之を聞き入れず、其女の夫に此葬儀の壯嚴なるは家族の名を擧げ、世の人擧げて稱讚すべしと保證し、儀式は萬事キリストンの流儀に且つ神父によつてやつて貰ふといふ承認を得た。果して神父等は京都の新會堂に於て、晴の禮服を着飾つた若い學生や、優秀な音樂士大勢を以て壯嚴にこれを執行した。議論に長けたる一人の神弟は、坊主共の宗旨のつまらぬ事や其手練手管に就いて説教し、且つ靈魂の救濟の眞なる事を論證した。同町の人悉く此儀式と、神弟の滔々たる説教に感心した。然るに坊主共は大いに憤慨して、神父等は公方様の特別の命令に背いて數多の改宗者を出し、坊主共の滅亡をはかる有罪者として、公方様の前に告訴する事に意を決した。

君主が關東より歸るや、彼等は其面前で怨言を言つた。公方は初めは憤慨し、宣教師や其宗教に對して敵意を含んだ言葉を放つた。然るに幾もなくして上野殿 (Ganouke dono) の斡旋と、同時にボルトガルとの通商を維持して行きたいといふ秘かな希望があり、且つ又坊主共の陰謀を看破した爲、彼は怒を和らげて、神父等が其教義を廣めんとするのは、至極尤もの事であると坊主共にいつた。

秀頼公の母、政所様は、狂的の異教徒であつて、坊主共に煽動せられて、自ら宣教師を告發しようとした。ところが公方は其申請を聊かも重んじなかつた。併し彼も此王妃に遠慮せんとして大阪の城壁に掲示し、漠然たる言葉を以て工夫され、但し實行される筈のない命令を貼り出した。この命令には、次の如くあつた。「殿下は多數の人々が、伴天連の宗門に入る事を知られ、其命に違背せるを痛く不満足の體に御座候、殿下は其家臣、並に女中等に對し先の撻を守るべきを命ぜられ、且つ前記の家臣下僕が伴天連の宗門を信ぜざるやう嚴重に注意するが今後肝要にして、之を信じたる者共は他を選ぶべきものなり」と。此命令は陰曆四月二十日 (○陽曆五月二十六日) に發布された。

其間に、神父ジャン・ロドリゲスは既に太閤様の存生中から、毎年やつてゐたやうに支那の船の事で京都に上つた。彼は公方から厚き待遇を受け、管區長の贈物なる太陽と月の盈虧並に日時を報ずる美しい時計を獻上した。諸人

は、坊主共や秀賴の母の計畫が君主の計畫の上に何等の影響を及ぼさなかつたのを知つた。而して幾もなくして、デ・カルケラ師が君主を訪問したことにより、公方は宗教の事に關し益々寛大にした。

此司教が日本に到着以來、迫害、内亂及び帝國唯一人の主となつた公方の嚴重なる處置をとつたために、司教の長崎を離れる許可を得ず、又自由に牧師の職務を盡すことが出來なかつた。かくて現在の事情は好都合になつたので、司教は主權者を訪問に行く計畫をたてた。一庵（Yetschiam 小笠原一庵）と稱する幕府の重臣の一人は、既にボルトガル關係の用務の監督として派遣せられたのであつたが、彼は司教に助力を申込み、其會見の許可を得た。

司教は取敢へず多くの神父及び神弟と共に出發の途に上つた。彼は大阪に至つて、一庵の遣した一隻の川船を得淀川（Yedogawa）を溯つて京都に至り、神父の家に行つて泊つた。大阪に於ても其途中でも、又京都に於ても到るところキリストンは群り來り、彼に敬意を表し、爲にキリストン宗門は、盡く其權利を恢復した觀があつた。セルケラ師は、謁見に際して司教の服を着て出て行つたが、駕籠のまゝ宮殿の内部に入るの許可を得たのであるが、之は大々名

でもなければ與へられない特權であつた。公方自らも亦禮服を著け、最も厚く司教を待遇した。次に平素の居城、伏見の宮殿、及び城と京都の宮殿とを司教に見せる命令を下し、同じく日本國中で最も壯麗なる寺院を總て見せる命令を下した。^{〔註七〕}司教は其滯在を機として、最も好意を示して居た諸侯、殊に宗門の保護者たる君主の第一の寵臣上野殿（○本田正純）及び京都の所司代板倉殿（板倉勝重）に謁した。彼は又此機會に夥多のキリストンに堅信の秘蹟を授けた。歸途、彼は豊前の首府小倉に於て國主越中殿（○細川忠興）に敬意を表したが、國主は彼に司教のミサ聖祭に臨むの許可を請ひ、宗門並に宣教師等に對する變らざる保護を新に請合ひ、又國主自らも心中に於ては、キリストンであつて、未だ聖なる洗禮を受けてゐないけれども、司教は國主を精神的の子の一人と認めなければならぬといつて、國主が自らキリストンたる事を宣言し、洗禮を受ける事の出來ない唯一の理由は、諸侯がキリストン宗門に改宗する事を禁じた公方の意志に添ふ爲なる事を附言した。

彼は尙八代の獄中につれて憔悴して居つた。彼等は艱難の最中なほ、殊勝にもイエズス・キリストに對する愛の爲に耐へ忍び、其法兄弟フレールにとつては嘆稱すべき鑑であつた。決して外の空氣が通つて來ない臭氣の激しい洞穴の中にあつて、ジョアキムは、重病にかゝつた。有馬から一人の日本人の神父が派遣され、夜漸く町に着き、其町では善良なキリシタンの家で好遇を受けた。告白者に聖寵といふ寶物をもたらす盜賊たる彼は、首尾よく牢に忍び込んだ。彼は彼等に會つて涙を流し、彼等の天晴な勇氣を愈々勵ました。ジョアキムの病は重く、死んだ人と選ぶところがない程で、愈々臨終が近くなると、殆んど續け様に讐言を言つてゐた。然るに神父の到着を知ると、彼は元氣づいて全力を恢復して告白した。次に彼はやがて囚はれたまゝ死んで行くのであるが、其動機をよく検證する爲に、誓約を書きとらせ同僚と共に之に署名(註入)した。

それから三人の囚徒の妻の告白を聞くを得たのであるが、而もその人々は宣教師に向つて其夫と困苦を共にしたいとの熱望を披瀝した。彼女等は又、之に答へた他のキリシタンの詰所に托されてゐた。

神父は、同國の首府熊本、及び元ドン・アウガスチンの本城たる宇土を訪問することが出來た。

八月二十六日(○七月二十五日)、ジョアキムは聖者の如く地上の生涯を終り、天主の御許に行つた。二年前、身を挺して囚徒となつた時、彼はイエズス・キリストの爲に血を流して果て、剩へ半々に切りさいなまれたいと希望をのべた。

之より先、彼は有馬の學林に居た頃、かういふ意味の手紙を書いたことがあつた。併し、彼は刑手によつて體刑に處せられなかつたとしても、兎に角彼は牢内で信仰の告白者として息を引きとつた。ジョアキムの遺骸は、八代の公衆墓地に埋葬せられ、次いで三日目に秘かに有馬に移され、管

他囚徒二人も同じく告白し、天主の爲にもつと艱難を嘗めたいと思ひ、死ぬ事の外には何の望もない、殉教の道によつて天に行くより外には、別に牢獄を出る考のない事を公言した。

神父は、接待宜しき家に歸り、其處で漸く、病人や老人

た殉教者ジヤン・ミナミ・ゴロザエモン(Jean Minami Gorayemon)とシモン・タケダ・ゴヒヤウエ(Simon Ta-

quenda Gofioye)の葬儀と同じやうであつた。

此年、耶蘇會では會員數名を失つた。

此間は、主計殿は八代に來り、ミケル及びジャンの事に關して、部下の役人に相談を受け、彼等は死ぬまで牢に入れておかねばならぬと答へた。二人の告白者は、イエズス・キリストの爲にすつと長い間苦しむ機會を與へ、榮冠を保證する宣告を受けて特によろこんだ。彼等は、牢内に在つて相變らず問答師の職をつとめ、隣人を教育して居つた。總てキリストは引きりなしに彼等を慰問し、爲に牢獄は教會堂と代つた。降誕祭の夜、諸人は救世主が人類の間に生れ給ふた事を祝ふ爲、其處で聖書を讀んだ。かくて神は、その信者によつて榮あらしめられた。

主計殿は、此事を知つて愈々激昂した。彼は直ちに二人の囚徒を死刑に處することを望んだ。而して若し彼が之をしなかつたならば、それは彼等から殉教の光榮を奪はうといふのであつた。彼は囚徒を寂しい所に移し、人との交渉を全然断たうと考へてゐた。併し、キリストの救主は、砂漠の中で四十日の間斷食し、キリストは其救主と一様に見られるといふ廉で慰を受けるであらうといった異教徒の助言に従つて、彼は彼等を無理に牢に入れて置くことゝし、たゞずつと彼等の苦痛を増すやうな方法で、更に嚴し

ボン港の入口で難船の爲に死んだ。彼は、波浪から助かることが出来たが、この世から果てゝ行かうとする乗組員の精神的の救濟を選んだ。彼は止つて之等の罹災者の告白を聞き、聖き言葉を以て彼等の信仰を堅め、彼等と共に死んで行つた。

四月五日(○二月二十八日)支那の廣東にて、支那人の神父フランシスコ・マルチネス(François Martinez)が死んだ。彼は同國人中耶蘇會に入會を許された最初の人であつた。彼は印度、日本及び支那にて三十年間働いた。彼は南京の官吏の旅券をもつて廣東に潛入した所、町は混亂中で彼は虜になつた。彼は竹の拷問(?)にかけられたり、刀物の尖先を手足の爪の下にさゝれた。外國人の間牒と間違られ、征服者の爲に武器を買ひに來たものと責めたてられ、彼は容易に身の潔白を證した。併し、笞刑を受けて五日目に彼は獄中で死んだ。諸人は彼を城廓外に埋葬した。彼が貴重な遺物は間もなく漳州(Tchaotcheou)に移された。

(註1) Gio. Rodrigues Giram, Lettera dell' anno 1606 (av

eg. celles de 1603, 4, 5). Guerriero. Relacan de.....1607 et
8. (Faits de 1606.) Lisbos 1611, 4°. Relazione della gloriosa
morte di IX Christiani. Roma, 1611, 8°. Aduarte, I, I, c.
LXIV. P. Jac. Orfanel. Historia ecclesiastica de Japon(Ord.
de Predicadores) Madrid, 1633 4°. S. Maria. Chron. de S.
Joseph. Sicardo, I, I, C. VII, et I, II, c. 1. S. Juan de la

Concepcion, t. IV, c. IV. Vita del P. Al. Valignani, scri-
ta dall' abate Ferrante Valignani. Rose, 1698, 4°.

(註11) 附錄第十一號

(註12) 附錄第十二號

(註13) 我等が名神父アレキサンタル・ワリ＝ヤニの殊勳と

彼が印度及び日本に於て多年の間、一方ならぬ艱難辛苦して

天主並に耶穌會への奉公の爲成就した事業は、耶穌會の全會

員が感謝の特別の標によりてかくも偉大なる人に榮あらしめ

る此當然な稱號を要求してゐるやうに見える。終りに、銘々

が自身で行うであらう投票の外に、尊師は其國の神父等が悉
く“サを行ひ、神弟が神父の靈魂の爲に祈禱を唱へることを
命ずるやあら”。(一六〇七年五月十六日附 神父長の
書翰。Vita del P. Valignani 神父ヨリ＝ヤー＝傳)

(註14) 此會議の調書は最近入手したばかりである。(附錄第十
三號)

(註15) 之等の宣教師の中に神父ルイス・ソテロ(P. Luis So-
telo) あるた。彼は耶穌會の神父等と長く間意見の衝突のあ

つたのは遺憾の事であつたが、其後一六一四年(寛永元年)殉
教した。此神父はセヴィルの貴族の出身で、成年に達してから
アンダルシア(Andalousie)の聖ペウロの嚴格なる規則を守
る跣足派の管區に入った。

(註16) マンシベロ會の宣教師等は、當時日本に九名の神父が居
られた。

(註17) 此年江戸の皇城が築かれた。(内裏年鑑、附
錄)

(註18) 附錄第十四號

(註19) 附錄第十四號の11

(註20) Guerr. ann. de 1606.
Semedo. Imperio la China.